
スイッチ×2=大変です…

ワト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイッチ×2＝大変です…

【NZコード】

N5290Z

【作者名】

ワト

【あらすじ】

高校の入学式当日に遅刻した俺、峰斗は生徒会長に捕まってしまふ。さらに昔助けた女の子とその会長がいきなり彼女の立候補に…。
・しかも2人共可愛いときた…これからどうなるんだ、俺

⋮

今日は高校の入学式…なのですが俺武原峰斗は只今絶賛遅刻中です、何故入学式に遅刻?と思うかもしけんがそれは、あの時計のせいなんです…高校に受かったと同時に一人暮らしをはじめ毎日同じ時計のアラームで朝起きてたはずなのに今日に限つてあの糞時計ならなかつたんです…だから只今俺は絶賛遅刻中なんです。

「そここの生徒、新入生だろ何故入学式の日から遅刻している?」

「うわあ綺麗な人だなあ…生徒会の腕章をつけているって事はこの人生徒会の人なのかな?」

「何を黙つている?それにその前髪長くないか?入学式の日なんだからちゃんとしないかッ!」

「えつすいません…じゃあ俺体育館に行きますんで」

「ちょっと待て前髪はどうするんだ?」

「ああ前髪どうしようかな…今からじやどひじみつもないひとりあえずこのまままで行こうかな。」

「明日切つてくるんで今日は勘弁して下さい」

「いや今どうにかしないとな、そうだッ!私が切つてやる」

「いっいいえ結構です…それに髪切れるんですか?」

「大丈夫だ私に出来ない事はない、だからちょっとついてこい」

目の前にいる綺麗な人は、峰斗の腕を掴むとまだよくわからない学校の中を引っ張り生徒会室につくとドアを開けて入った。

「さあ中に入れ、誰もいないからつて変な気は起こすなよ?ただ前髪を切るだけなんだからな」

「起こしませんよ…早く前髪を切るなら切つて下さい」

「わかつている動くなよ?動いたら変になるからな」

峰斗が頷くのを確認すると、近くにあつたハサミを取りだし前髪を切りはじめた…。

「あつあの切りすぎじゃないですか…?」

「大丈夫だこの位でちょうどいい！」

前髪を切り峰斗の顔が見えるようになると急に顔を赤くはじめた。

「急に顔を赤くしてどうしたんですか？もしかして風邪ですか？」

「君の名前はなに？よかつたら教えてくれない？」

「おっ俺の名前ですか？俺は武原峰斗です」

「そつか武原峰斗か…彼女や好きな人はいるの？」
さつきからこの人おかしいような、それに雰囲気が変わった気がする…。

「いいいないですけど…ってこんな話しあが恥ずかしいだけじゃないですか？」

「あつごめんね？彼女とか好きな人がいるのかなあつて気になつて…」
「いや謝らなくともいいです…でもどうしてそんな事が気になるんですか？」

「それは…あのさ峰斗君に彼女がいないなら私立候補していいかな？てかさせて下さいッ！」

立候補…？立候補…？何で今日初めてあつた人がそんな事言つわけ？意味がわからない…。

「あつあの…俺は先輩の名前も知らないし、てか何も知らないんですけど」

「あつ忘れてた…えつと私は一年の立花美紀です、一応生徒会長です」

「立花先輩ですか…でも何で俺の彼女に立候補するんですか？」
「それは…言わなきや駄目かな？恥ずかしいんだけど…」
恥ずかしい、言いたくない、立候補…もしかして一田惚れ…？
理由がわからないと立候補はちょっと…」

「えつ…笑わないでね？私峰斗君に一田惚れしたの、だから立候補したいの」

やつぱり俺が思つてた通りだつたか…。

「でも立花先輩つて綺麗だから彼氏いるんじゃないですか？それに

男子から人気そうだし」

「あのさ立花先輩って呼ばれるのいやかも…あと私彼氏なんてでき
た事ないよ?」

「本当にできた事ないんですか!…いそつなのに…名前は立花先輩
以外なら何て呼ばれたいんですか?」

「本当にいないよ、いたら立候補何でしないし…名前は美紀つて呼
んでほしい」

美紀か…美紀先輩、美紀さんどうちで呼べばいいんだろ?

「あつでも美紀に先輩とかさんとかつけないでね?呼び捨てで呼ん
でほしいの」

「でも歳上だし…それに生徒会長なんですね?歳下の俺が呼び捨て
にしたら周りの先輩達が…」

峰斗が顔をしかめながら言つと、美紀はああと理解したように頷い
ていた。

「だから呼び捨てにはできませんよ…美紀さんか美紀先輩つてなら
呼べますけど」

「ううんじゃあ他の人がいるときはそれでいいけど、2人の時は美
紀つて呼んでくれる?」

「まあ2人になる事があれば…つてこんなゆつくり話をしてる場合
じゃないんですよ、入学式始まるじゃないですか」

「あつそうだつた…じゃあ早く髪切り終わらないとね」

ハサミを前髪に近づけると凄い速さで切り終わった、そしてお礼を
言うと峰斗は、生徒会室から出て体育館に向かつた。

「峰斗君かつこよかつたなあ…私一日惚れ、いや男の子を好きにな
つたの初めてかも」

「会長、そろそろ体育館に向かわないと入学式が始まりますよ」

「ああ由香か…わかつた今すぐ向かう、入学式には遅れられないか
らな」

美紀はそう言うと体育館に向かわないと入学式が始まりますよ
が席を探していた。

「席どこだよ…こんなに人が多かつたら見つからないよ」

「あつあのお…あなたの席多分私の席の隣だと思います」

声のしたほうを見てみるとそこには、眼鏡をかけ髪を田までおろしたいかにも地味な女の子がいた。

「あつありがとうございます…ってだれ？知り合いませんよね？」

「私は皆川ヒメっていうします、多分同じクラスになると想ひ…とりあえず席につくよ」

「そうだね…あつ俺武原峰斗っていうんだこれからよろしく」

「うんよろしく、じゃあ行こうかもうすぐ入学式始まるし」

峰斗は頷くと、前を向き歩き始めたヒメの後ろをついていった、そして席につくとすぐに入学式が始まり校長の話し、新入生代表の話し最後に生徒会長の話しが始まった。

「ねえ峰斗君、生徒会長の人綺麗だね、私とは大違ひ…」

まあ確かに綺麗なんだけど、さつきあんな事があつたからあんま直視できないんだよね…

「確かに綺麗だけど皆川さんだって髪を上げて眼鏡をとれば…」

「うそ…？まじで可愛いんだけど…髪を上げれば美紀さんと同レベルかもしけれない…」

「ちよつちよつと峰斗君…？髪上げないで、私顔に自信がないからこんな風に隠してるのに…」

「それ本気で言つてる？本気で言つてるならそれは間違いだよ…」

「それどうゆう事？、もしかして私が思つてる以上に酷いの！？」
まああるいみ酷いかも…こんな可愛い顔で自信がないとか他の女の子が聞いたら絶対怒る…。

「皆川さんが思つてるほつの反対、皆川さん自分じゃ顔に自信がないって言つてるけど、俺はそんな事ないと思つだつて普通に皆川さん可愛いもん」

「えつ…？私が可愛い…いやいや絶対にそんな事ないよ、もしかして峰斗君つてB選…？」

皆川さんを可愛いって言つてB選なら他の女の子なんてどうなるん

だろ…。

「おいそこの一 年2人、話してないで私のいや生徒会長の話しきりつけ！？」

あつ気づかれた、まあ俺は知らないフリをして無視するんだけど。「皆川さんと話すの楽しいけど今は静かにしどこつか、あの生徒会長に怒られるし」

「そうだね、楽しいけど先輩に怒られるの怖いし静かにしてるよ」2人は互いの顔を見ながら笑うと前を向き美紀の話を聞き始めた、そして入学式が終わり教室に行こうと2人で廊下を歩いていると後ろから声をかけられ立ち止まつた。

「おいお前達、さつき私の話を聞かずに話していた2人だな？」
「あつ生徒会長さん…峰斗君、どうしよう怒つてるのかな？」
「怒つてるよう見えるけど…まあ別に大丈夫なんじやない？」
ただ気になるのは、口調と雰囲気が立候補するつて言つた時と全く違う事なんだよね…。

「何故私の話を聞かずに2人で話していたんだ？それとお前は武原を何で峰斗君って呼んでいるんだ」
あれ峰斗君つて呼んでたのに今武原つて…何で？
「えつと友達だから？峰斗君と私つて友達だよね？」
「まあ皆川さんがいいなら友達だね、今日初めて会つたばかりだけど」

「じゃあ友達で、あれ？生徒会長さん何で峰斗君の名前知ってるの？知り合いで？」

ここで知り合いつて言つたらおかしいよな…普通入学したばかりの人が生徒会長と知り合い何てありえないし。
「私は武原の彼女候補だ、だから知り合いで上だな」
「ちょっと美紀さん！？こんな人に多い所で何言つてるんですか」「私は彼女候補じゃないのか…？私はてつきりもう彼女候補だと思つてた」

峰斗は、新入生や先輩達からの殺気がこもつた視線を感じ焦つてい

た。

「ちょっと待つて下さいッ！何で初めて会ったはずの生徒会長さんが彼女候補何ですか？」

ヒメが言つた事に周りにいた男子達も頷いていた。

「それは、私が武原の彼女に立候補したからだ」

「つて事は峰斗君に一日惚れしたつて事ですね？」

「まあ そうなるな、それに一日惚れしたから彼女に立候補したんだ」「じゃあ私も峰斗君の彼女に立候補しますッ！」

周りにいた男子も峰斗も美紀も急な展開に理解ができていなかつた。

「峰斗君ごめん… 私一回峰斗君に会つた事あるんだ、覚えてないかもしれないけど…」

「俺と皆川さんが会つた事あるの！？」「ごめん覚えてない…」

「私と峰斗君が会つたのは、去年の夏で男子に苛められてる所を助けてくれたの」

「俺色んな人を助けてるからなあ… 去年の夏だって10人は助けたし。「叩かれたり悪口言われたりしてるとを男子達から守つてくれて、その後も色々優しくしてくれた」

「ごめん覚えてない… 何かヒントがあれば思い出せるんだけど」

「じゃあポチって言えば思い出す？」

「ポチ… ポチ！？ あのいつまでもついて来たから何となくポチつてあだ名をつけた女の子か…」

「思い出したみたいだね… 私があの時峰斗君が助けてくれたポチです」

「まじでポチなの…？全然気づかなかつた」

「へへへ、私は最初から気づいてたんだけど言い出せなくて」

「でもあの時のポチが皆川さんでみんなに可愛いなんて…」

「武原、話についていけないんだか… 結局こいつは知り合いなんか？」

「知り合いのポチです、今思い出しました…」

「知り合いじゃありません、私は峰斗君のペツトのポチです」

ペットと云う言葉を聞いて周りにいた人達も近くにいた峰斗や美紀も固まってしまった。

「ほりあの時峰斗君がお前、昔飼つてたペットみたいって言つてたし

「だからってペットはないんじゃ……俺ポチがペット何て言つてないよ」

「私がなるつて決めたからいいの、それに最初はペットかもしけないけどいつかは彼女になるんだから」

最初も何も人間のペット何ていらないんだけど……。

「おこそここの男ッ！こんなか弱そうなな少女をペット扱いとは何様だ」

周りにいる野次馬を押し退け知らない男が峰斗の胸ぐらを掴んで大声で言つた。

「お前誰だよ……それに俺はポチをペット扱いなんかしてねえ」

「僕はレディの憧れの的高谷正樹だッ！」

「いや知らないし……それにレディの憧れの的つて自分で言つて恥ずかしくないの？」

「僕は本当の事を言つているだけだよ、それはこの美貌を見ればわかるだろ?」

美貌つてこいつ別にイケメンじゃないしてか普通より下だ。

「とりあえず離してくれない？苦しいんだけど……」

「いや離さないよ、僕はこのか弱そうな少女がペット扱いされてるのが許せないからね」

「おい……峰斗君が離せつて言つてるんだから、わざと離しやがれツ！」

ポチが変わった!?チワワから土佐犬並みに変わった……。

「僕は君がペット扱いされないようこの男と話しているんだよ、それこれから君に近づかないよ」

「誰がそんな事を頼んだ？むしろ私は峰斗君のペットでもいいから側にいたいんだよッ！」

「君の名前は何て言うんだい？僕は今から君の事を助けるんだから名前位聞いてもいいよね？」

「こいつポチが言つてる事を全然聞いてない…」。

「私の名前はポチだよ、峰斗君がポチつてつけたんだからそれが私の名前だ」

「違うそれは君の本当の名前じゃないだろ？」

「私はポチだ峰斗君のペツトのポチだッ！」

「だから君はこの男のペツトじやないんだよ…まさか洗脳しているのか！？」

「うわあこいつうざ…周りにいる人達も明らかに引いてるし」

「君がこの男のペツトで側にいたいというのは洗脳されているからだ…よしつ！これからはずっと僕が君の側にいてあげる、だからこの男の事は忘れるんだ」

「私は峰斗君以外の人の側になんかいたくない、それにお前みたいなナルシストで上から目線の奴の側はもつといたくないッ！」

「僕の優しさがわからないとは…もういい穩便に済ませよつと思つたがやめだ、今からこの男を叩きのめす」

胸ぐらを掴んでいた手を峰斗から離すとおもいつきり峰斗の顔を殴つた。

「いつてえ…急に殴る事ないだろ？それにお前勘違いしちゃダメ」

「峰斗君の顔を殴つた…もう許さない」

「それは私も同感だ、私の好きな人を殴る奴は許さん」

「生徒会長さん、あなたもこの男に洗脳されてるのか…お前はそんなにレディを待らせたいのか？最低の奴だな」

最低と言われた峰斗は一瞬キレそうになつたが必死にキレるのを抑え我慢していた。

「君達2人もそうだ、洗脳されたからといってこんな最低の男を好きになるなんて…僕を好きになつていればよかつたのに」

「ははは、お前どんだけ俺を悪く言えばいいんだよ…それに2人がお前の事を好きに？絶対にならねえよッ！」

峰斗が言つた事に2人も頷いていた。

「それはこの美貌を見てから言つてほしいね、君より僕のほうが格好いいんだから2人も君より僕を好きになるはずさ」

「この中の下のナルシスト野郎が…お前友達いねえだろ?」

「最低な君に関係ないだろ、それに僕は女の子の憧れの的なんだよ」「じゃあ周りにいる女子に聞いてみようぜ…こいつは周りにいる女子達の憧れの的がどうかをよ」

完全にキレた峰斗は正樹にそう言つと近くにいた女子に聞き始めた。

「美紀やポチはこいつの事どう思う? 憧れの的か?」

「そんなわけないだろ、私は武原以外の男には興味ないしな」

「私も峰斗君以外の男の人以外興味ない、それにあのナルシストはまず生理的に無理」

「そうだよなじやあ他の人達はどうだ、こいつは憧れの的か?」

大声で近くにいた人達に聞くと周りにいた人達は首を横に振つたり違うと叫んだり返事を返してくれた。

「どうだ、お前は憧れの的じゃないんだってよ…」

「ここにいる女子全員を洗脳したのか…君はどれだけ最低なんだ?」

君みたいな男は僕が絶対に叩きのめす」

正樹はそう言つと、峰斗に近づきまた顔を殴ろうとした…しかし完全にキレている峰斗はそれを避けると正樹の頭に回し蹴りを食らわせた。

「何回も殴らせるかよ…つてこいつ氣絶してるし」

気絶しているとわかつた峰斗は苦笑いしていた、そして周りにいる人達からは歓声が上がり峰斗達の周りは騒がしくなつていた。

「こいつ口だけだつたんだな…にしても勘違いしそうだろ」

「峰斗君つて強いんだね? 助けてもらつた時は殴られてただけだから知らなかつた」

「まあ今回は特別つて事で、普段はキレイなから殴る事もないし」

「これは生徒会長として許してはいけない事だ…しかし今回はいつもが一方的に悪いから内緒にしておこう」

「それほどのも…つてこつまでもいいで騒いでたら先生達が来るな

…」
さすがに騒ぎを聞きつけたのか先生達はもうこの場所に向かっていった。

「仕方ない…皆さんいい加減ここから逃げないと先生達が来ますよ、
それじゃあ俺達は逃げるんで皆さんも逃げて下さいね」

峰斗は周りにいる人達に大声で叫ぶと美紀とポチの手を握つて走り始めた。

第一話双子の姉&新しい友達登場（前書き）

2話投稿、馴文ですがこれからもよろしく

第一話双子の姉&新しい友達登場

峰斗はある程度逃げると美紀と別れポチと一緒に教室に向かっていた。

「あつ俺の席つてポチと近い？遠くなら話しくいし…」

「峰斗君の席は私の隣だよ、それに峰斗君の席は窓側の一番後ろ」

おつかなりいい席だ、それにポチと席が隣なのは嬉しいかも。

「それは最高だね、にしてもまだ教室につかないの？」

「もうすぐそこだよ、ほらあそこツ！早く行こうよ」

「そうだね、何かあのナルシストのせいで疲れたし椅子に座りたい」峰斗が小さい声で呟くとポチが峰斗の手を握り教室に向かつて走り始めた、そして教室の前につくと手を離しドアを開けた。

「なあポチ、視線凄くないか？俺どこか変かな…」

「いやどこも変じやないよ、多分さつきのを見てた人達が話してたのかも…」

ああだから男子は殺気がこもってる視線を俺に飛ばして、女子は意味がわからない視線を飛ばしてるのが…。

「おつさつきの回し蹴りの人やん、さつきのカツコよかつたばい」

「えつとだれ？クラスメイトっていうのは確か何だけどそれ以外知らない…」

「それはそうやし、だつて僕まだ自己紹介もしどらんけんね、僕の名前は宮下春つて言つんよ」

何か女の子みたいな名前だな、それに制服は男物だけど女の子にしか見えないし。

「俺は武原峰斗、気軽に峰斗つて呼んでいいから」

「峰斗が、じゃあ僕の事は春つて呼んでいいばい！じゃあこれからよろしく峰斗」

「ああよろしくな春、つて手小さい女の子の手みたい」

握手した峰斗は春の手があまりにも小さいことに違和感を感じた。

「そんなわけないやん、女なら男物の制服きらんつて」

「まあそれもそうか、じゃあポチ席に行こつか?」

峰斗が隣にいるポチに声をかけ自分の席に向かうとポチもその後をついていった。

「ここか…つて春は前の席なのか?」

「そうみたいやね、なんか運命感じるばい」

「男にそんな事言われても嬉しくないって…」

「まあ確かにそれもそうやね、それに峰斗には2人も彼女候補がいるし」

春つて最初から見てたんだ…なんか恥ずかしいかも。

「恥ずかしいから言わないでくれ…そしてポチはそんなに俺を見つめないで」

「峰斗君カツコいいなあつて思つて見てたんだけど氣づいてたんだ」「だからそんな恥ずかしい事言つくなよ…それに周りの男子からの視線が凄いんだよ」

峰斗は気づいていないが視線を飛ばしているのは男子だけじゃなく、女子も飛ばしている。

「じゃあペツトのポチがご主人様の顔を見てたつて言つのは?」

「そつちのほうが絶対に駄目…」

「はは、2人は面白かねこれなら学校生活が楽しくなりそうばい」「俺はこれが続くようなら学校に来なくなるかも知れないけどな…」
だって毎日この視線つて耐えられそうにないし、多分教室を出ても美紀のせいでき々ありそうだし。

「それは駄目ッ！峰斗君が来ないなら私が峰斗君を毎日迎えに行くから」

「それなら僕も迎えに行くよ、その為に家がどこか知る必要のあるね」

「峰斗君つてどこの辺に住んでるの?家族も一緒?」

「いや一人暮らしだよ、家は結構学校から近い、多分5分位しか離れてない」

峰斗が言つた事に2人はにやけていた、そしてそれに気づいた峰斗は嫌な予感しかしていなかつた。

「今日峰斗君の…」

「駄目、絶対に駄目ッ…どうせ今日俺の家に遊びに来るつて言つんだろ？」

「正解ッ！つてことで今日峰斗の家に遊びに行つてよか？」

「だから駄目だつて…つて言つても2人ともついて来るんだろ？」

峰斗がそう言うと2人は満面の笑みで頷いた。

「はあ…じゃあ来てもいいけど荒らさないでね？」

「ええ…峰斗君のアルバム見よつと思つてたのに」

「まあアルバム位なら見せるよ、あつでも美紀には内緒な？」

美紀まできたら部屋が騒がしくなるし、ポチとケンカしそうだし…。

「うんわかった…あつさつきのナルシスト男だ」

「本当だ…同じクラスだつたんだ何か頭が痛くなつてきた」

「峰斗、あの人凄い勢いで峰斗に近づいてくるよ」

春がいい終わつた頃には、峰斗の目の前に来ていた…そして頭を抱えている峰斗の胸ぐらを掴むとまた顔を殴つた。

「よくも僕に恥をかかせてくれたな…絶対に許さんぞ」

「また殴りやがつたな…それに俺はお前に許してもらおう何て思つてねえよ」

「貴様に洗脳されている2人は必ず僕が助けて見せるッ！そして助けられた2人は僕に惚れるんだ」
うわ…助けるならまだしも惚れるつてありえないだろ、その前にこいつ下心ありすぎ…。

「ねえ君…峰斗に迷惑かけるならどうかに行つてくれない？」

「君は誰だ？僕に話しかけていいのはレディだけだよ」

「ねえ峰斗、この人うざいね…イライラする」

確かにこのナルシストは見てるだけでイライラする…。

「何で俺をそんなに目の敵にするわけ？俺お前に迷惑かけてないよね」

「それはレディをペット扱いしての最低な男だからだ」

「じゃあどうすればお前は俺を目の敵にしなくなる?」

「それは君が洗脳している2人を僕に渡し、2人に一生近づかない事だ」

「それを決めるのは俺じゃなくてポチと美紀だ、2人がお前の所に行くなら俺は何も言わないけど、もし2人がお前の所に行きたくなつて言つたらどうする?」

2人は絶対にこのナルシストの所には行かないと自信がある。

「もし僕じゃなく君を選んだなら僕はもう何もしない、まあ絶対に僕の所に来るんだけどね」

「じゃあとりあえずポチから聞こいづせ、ポチは俺とこのナルシストどっちがいい?」

「そんなの僕に決まっている、さあ早く最低男の洗脳から解放され僕の胸に飛び込んでくるんだ」

「誰があんたの胸に飛び込むか…飛び込むなら峰斗君の胸だよ」
ポチは蔑んだような目で腕を広げている正樹を見ると、すぐに田線を峰斗にうつして胸に飛び込んだ。

「おっおい、恥ずかしいから離れるよ…」

「もうちょっと抱きついていたかったんだけど…」

「うつ嘘だッ！何故僕の胸に飛び込んでこない…わかつた、また洗脳したんだな」

「もう君見るとイライラするんだよね…だからちょっと黙つてて?」

春が騒いでいる正樹に冷たく言つがそんな事は気にせず正樹は大声で叫んでいた。

「お前うるさい…ちょっと黙つてひ」

峰斗は騒いでいる正樹に近づくと誰にも見られないようにしながら正樹の顎を殴つた。

「ふうこれでしばらくなつまはそこいら辺に寝かせとくか」

「はあい席について、HR始めるよとあります最初は自己紹介からね」

正樹を後ろのほうに寝かせるとドアから担任の先生が入ってきてそのままHRがはじまりクラス全員の自己紹介が始まった。

「私は担任の槙原です、じゃあ次の人」

自己紹介は順調に進みポチまで回ってきた。

「皆川ヒメです、峰斗君からはポチって呼ばれます」「ポチが自己紹介すると女子は、拍手したが男子は地味なポチに興味はないのか近くにいる人達と話していた。

「じゃあ次は僕、僕の名前は富下春、中学までは九州のほうにおってなまつとるけどよろしく」

春の次は俺か…何て言おつかな?。

「えっと武原峰斗です、一年間よろしく」

「はいッ！私武原君に質問があります」

「面倒じゃないのなら別にいいよ」

「武原君は彼女いますか？それとも好きな人」

この質問にクラスの女子ほとんどは峰斗が言う事に注目していた。

「彼女や好きな人はいないです、つて恥ずかしいだけじゃん」

「じゃあ私にもチャンスがあるって事だ」

「駄目です、峰斗君は渡しませんッ！」

「ちょっとポチ！？いきなりそんな事言わないで」

にしても周りの男子、可哀想とか最悪とか地味な奴に好かれてもとか言つてるけどポチの素顔見たらどんな反応するんだろ…？

「ほらポチ座つて、俺が恥ずかしいだけだから…」

「わかった…でも峰斗君は渡さないから」

「はいはい、とにかく座つて…座らないと今日家に来させないよ？」

峰斗が冗談で言つてみるとポチは凄い勢いで椅子に座つた。

「峰斗って女子から人気やね？まあ男子からは好かれそうにないけど…」

「女子に好かれても…男子の友達が欲しいよ」

「僕があるやんツ！－とりあえず男子の友達1号ばい」

「そつか春がいたな、でも春って女装したら女にしか見えなさへつだな…」

「身長低いから、口リにしかならなこと思ひナビ…。

「今なんか失礼な事考えたやろ？」

「いや別に、ただ春が女装したら小学生にしか見えないだろうなつて」

「かなり失礼やしつ！まあ僕は女装何てしないけどね」

「文化祭の時に無理やり女装させてみよつかな…。」

「文化祭の時ば狙つても絶対にせんけんね」

「エスペーか！？まあそこまで嫌がるなら別にさせないけど」

「うん絶対にいやばい…－とりあえずHRが終わるまで静かにしどかな」

「そうだな、このHR終われば今日は家に帰れるし」

「ただ2人が家に来るから騒がしくなりそうだけど…あと美紀にバレンタインいけど。」

そしてHRは10分ほどで終わり、3人は帰る準備をしながら話していった。

「今から峰斗君の家に行くんだけどお皿い飯どうする？」

「家に色々あるから俺が作つてやるよ、まあ俺の作る料理が口に合わなかつたら適当に自分で作つて」

「おお楽しみやね峰斗の料理、口に合わんでも全部食べるばー」「いや口に合わなかつたら食べなくていいんだけど…まあその時はカツブリーメンでも出すか。」

「この僕の口に君みたいな最低男が作った料理が合つわけないじやないか」

「こいついつ復活したんだ！？てか何か俺の家に来る気でいるし…。」

「何でお前が俺の家に来るみたいな事言つてんだよ…言つとくけどお前は絶対に家の中に入らせないからな」

「なに！？僕を家にいれないだと…」

「ああ絶対に入れない、俺お前の事嫌いだし……かナルシスト + 上から目線の奴は生理的に無理」

峰斗が正樹に冷たく言つと、近くにいたポチと春は笑いをこらえていた。

「僕がせっかく君の家に行つてあげようと言つているのにそれを拒むとは……」

「ほらそれだよ、家に行つてあげよう、俺の家なんだから普通行つていい？ だろ」

「なにが君の家だ、親の家の間違いじゃないのか？」

「残念俺は一人暮らしだし家賃も自分で払つてるから、親の家じゃなく俺の家なんだよ」

まあ仕送りで家賃払つてるからもしかしたら親の家かもしれないけど……。

「でも……くそつもう何も言えないじゃないか」

「それなら何も言つな、それとついてきても絶対に家の中には入らせないからな」

「これじゃあ2人を助けられないじゃないか」

「だから助けるも何も2人が望んで俺の彼女に立候補してるんだからお前は助ける必要がないんだよ」

正樹は峰斗が言つた事を聞かずに頭を抱えて悩んでいた。

「峰斗君、今の内に帰ろう？ そのほうがこの人ついてこないし」「早く峰斗のご飯食べたかしね」

「じゃあこいつは、放つとして俺の家に行くか」

2人が頷いたのを確認すると峰斗は頭を抱えている正樹にバレないよう教室からでて校門に向かつた。

「なあポチ、あそこ人だかりできてないか？」

校門の近くまできた峰斗達は人だかりのあるほうを見て話していた。

「だれか有名人でもいるのかな？ 有名人って言えば私モデルの沙織が好きなんだ」

「へえ……沙織が好きなんだ確かにあいつ人気だしな」

「あいつ？もしかして峰斗君って沙織の事知ってるの？」

「えつ！？知るわけないじゃん、だって沙織って人気のモデルなんだよ？」

うわあ沙織が実は俺の双子の姉ちゃん何て言えねえ…。

「そうだよね、てっきり同じ年だから中学校が一緒に友達なのかなあ思つたよ」

「沙織が行つてた中学校つてめちゃくちゃ遠くにあるんだから一緒に訳ないよ…」

家族なんだから友達以上の関係なんだけど…。

「じゃあちょっと見に行こうよ、誰がいるか気になるし」

「そうだな…じゃあ行くか、でもさつきから嫌な予感しかしないんだよな…」

3人は人だかりのほうに歩き出した、そして近づく度に峰斗の嫌な予感は強くなり、誰がいるかわかる場所まで近づくと峰斗の嫌な予感は的中した。

「峰斗君すごいよッ！生の沙織が目の前にいるよッ！」

「そうだね…生の沙織が目の前にいるね…」

まさかあいつ入学式からいたとかじゃないよな？あいつも今日入学式のはずなんだけど…

「なんか峰斗テンション低いばい？」

「ああ大丈夫とりあえず早く帰ろうぜ…」

あのバカに見つからない内に…。

「ええもうちょっと生沙織見よっよ…」

「じゃあ一人で見てていいよ、俺は興味ないから帰る」

「あつちよつと待つてよ、私も帰るう」

人だから出来ている場所の横を通り抜け校門から出よつとしている峰斗の後ろをポチと春は、急いで追いかけていた。

「痛つ…誰だよ俺はあいつに見つかる前に帰るんだよ」

横を通り抜けながら歩いていた峰斗は急に前に出てきて当たつてしまつた人に文句を言つていた。

「ミイ君みいつけたッ！」

「俺をミイ君って呼ぶのはあのバカしかいない…」

目の前にいる人の顔を見るため倒れていた体を起こし、顔を上に向けるとそこには双子の姉、人気モデルがいた。

「お前がどうしてここにいるんだ…入学式のはずだろ」

「ミイ君に1ヶ月会えなかつたから寂しくなつて来ちゃつた…つて事で久しぶりにチューを」

「誰がするかッ！それに久しぶりにチューつてこの前のはお前が勝手にしてきたんだろ」

「こいつが家族じゃなかつたら喜べるんだけど、家族だからなあ…。」

「勝手じやないもん、将来結婚するんだから別に今してもいいんだもん」

「馬鹿美緒とは結婚できませんッ！他人でもしねえよ」

「他の人がいる所で本名言つたら駄目なんだよ？」

そんなり知らないし…俺にとつてこいつは人気モデルの沙織じやなく双子の姉の美緒だし。

「つるさい、お前の名前は美緒なんだから別に美緒つて呼んでいいじゃねえか」

「仕方ない、将来の夫の頼みだから呼ばせてあげる」

おおいきなり上から目線…つて美緒と話してる場合じやないし、やつぱり視線が凄い事になつてる。

「でここに何しに来たわけ？人気モデルの沙織がこんな学校にいたら騒ぎになるんだけど」

「だから寂しくなつたからミイ君に会いに來たんだよ」

「じゃあその大荷物はなんだ？まさか一緒に住むとか言わないよな？」

？

「そのままかなのですッ！今日から一緒に住ませてもらいます」

「まじかよ…あのババア何で許可だしたんだよ…。」

「駄目です、今すぐ母さんのいる家に帰つて下さい」

「了解です今から家に帰ります…つて帰つたら駄目なんだよ、今日

からミィ君と2人で生活するんだから」

「お前沙織としてのキャラ崩壊してるけどいいの？周り見てみる」

テレビでみる沙織の印象と違うのか周りにいる人達は困惑していた。

「いいんだよ、どうせモデル何て遊びでやってるんだから」

「よくそれで人気モデルになつたよな…他のモデルに聞かれたら殺されるぞ」

「その時はミィ君が助けてくれるよッ！」

うわあ決定事項なんだ…って忘れてたけどポチ達が後ろにいるんだつた。

「とりあえず腕を絡めるな…俺今から友達と家に帰るんだよ」

「女の子？私のミィ君を奪う氣なら許さないよ」

「お前の物じやねえよ…じゃあとりあえず紹介、右がポチ、左が春だ」

理解できていない2人に気にせず峰斗は紹介した。

「この子地味ね…これならミィ君を奪われる心配はないね」

「人を外見だけで見ないほうがいいぞ…ポチちょっとこっちに来て」
固まつたままのポチに声をかけると、驚きながらも峰斗の近くにきた。

「他の人からは見えないようにするから髪とメガネ外すね？」

「えっ！？自信ないから駄目だよ…」

「大丈夫、俺が可愛いくて言つたら可愛いんだから自信持てッ！じやあ外すからな」

峰斗はそう言つと、メガネを外し目の下まで伸びていて髪を上に上げ顔が見えるようにして美緒のほうに体を動かした。

「どうだ、人を外見で判断するもんじゃないだろ？」

「これは予想外だよ…モデルにもここまで子いない」

「まあこれがポチの本当の姿だ、本人は自信がないから顔を見せないようにしてみたみたいだけど」

「この子は危ないわね…油断したらミィ君を取られるかも」

だから取られる前にお前の物じやねえし…

「ねえ峰斗君、さつき沙織とは知り合いじゃないって言つてたけど
やっぱり知り合いなんじゃ…」

「こいつは知り合いじゃなくて双子の姉だ、だから家族だな…」

「峰斗君と沙織が双子で家族!? 予想外だよ」

ポチが大声で言つたから周りの人達も驚いていた。

「最低男が人気モデルの沙織と家族だつて…嘘だッ…どうせまた洗脳したんだろ」

「お前いつからそこにいたんだよ…教室に置いてきたはずだろ?」

「人気モデルの沙織の大ファンとして生で見ない訳にはいかないだろ」

「こいつ美緒の大ファンなんだ…あつ良いこと思いついた。

「なあナルシスト、俺がもし沙織にお前を紹介してやるつて言つたらどうする?」

「紹介してくれるのか!? それならお前の親友になつてやるつ」
いやこいつに親友になられても…でも紹介する事で付きまとわれなくなれば最高かも。

「いや親友はいいから付きまとつのやめてくれる?」

「そんな簡単な事でいいのか? それなら紹介してくれたら約束しよう」

「よしじゃあ今から紹介してやるよ…美緒こいつナルシスト男の」

「高谷正樹です、よかつたら僕の妻になつて下さい」

まさか紹介する前に話し出すとは… それも初対面の人にプロポーズとかありえない…。

「ミイ君、このブサイク君はミイ君のお友達?」

「いや全然、俺に付きまとうナルシスト男」

「なんだお友達じゃないんだ…私ミイ君以外の男の人に話しかけられるの嫌いなんだ、それに妻? 私はミイ君以外の人と結婚する何てありえないよ…」

「妻がいやなら彼女でもいいんだ、そこから愛を育んでもいいからね」

「ミィ君以外の男が私を口説こうと近づくなッ！」

おお久しぶりに美緒の回し蹴りみたなあ…でも俺にパンツ見せながらやるのはどうかと…見たかどうか確認してるし。

「峰斗君もこの人を回し蹴りで倒したけど沙織も回し蹴りで倒したね」

「そうだな、まあ双子だから一緒になつたんじゃない？」

「でも峰斗の回し蹴りより下手やつたばい」

まああいつは蹴りより殴るほうが上手いからな。

「ミィ君、早くお家に帰ろうよ」

「そうだな…母さんには後で文句言つからとりあえず家に行くか」

「峰斗の料理楽しみばい」

「えつミィ君がお昼ご飯つくるの？」

ああ美緒は俺の料理食べた事あつたな…。

「峰斗君の料理つておいしくないんですか！？」

「大丈夫、僕は不味くても全部食べるばい」

「違うミィ君の料理は美味しいんだよ、だから楽しみだなあつて」
美緒が笑顔で2人に言うと、2人は安心したように笑顔になつていた。

「何だよ…2人は俺が料理できないように見えてたのかよ

「峰斗君の料理してる姿を想像できなかつたから…」

「ああショック、ポチがそんな事を思つてたなんて…」

「峰斗君冗談だよ大丈夫美味しくなくても美味しいって言つからッ
！だから嫌わないで？」

ちょっと大袈裟に落ち込んだだけなんだけど…ポチつて知らない人に騙されそうだな。

「だからミィ君の料理は美味しいんだつて」

「はいはい、じゃあ家に行くよ？皆ついてきてね？」

「はいッ！ちゃんと峰斗君のあとについて行きます」

「峰斗の『』飯楽しみばい」

「春はさつきからそれしか言つてないよ？」

そんなにお腹空ってるのかな？じゃあ早く帰つて急いで昼飯作らないと。

「ほーり／＼君、早く行くよ」

「ちょっと美緒、手握るなよ恥ずかしいだろ」

「あつするいシ…じゃあ私も峰斗君と手つなぐ」

「あつポチまで…ちょっと離せよ恥ずかしいだろ」

峰斗が言つた事に2人は耳も貸さず家に向かつてあるきはじめた。

あれ美緒とポチつて家しらないよね…？

「大丈夫お母さんに聞いてきたから」

「Hスパーか…？って何かわざも言つたなこれ…じゃあ家までよ

ろしく」

「任せて、ミィ君はちゃんと家まで連れていくから」

美緒はそう言つと、一緒に歩いていたポチとアイコンタクトをして一気に峰斗を家に向かつて引きずりだした。

到着へちょっとした春の秘密？（前書き）

かなり遅くなりました・・・
まあ次もがんばります

到着～ちょっとした春の秘密？

引きずられながら家に帰ってきた峰斗は4人分のお昼ご飯を作っていた。

「何か食べたい物ある？作れる物なら作るけど」

「ミイ君が作ってくれるものならなんでもいいよ、それに愛情がこもってれば最高だね」

「とりあえず黙つて？ポチと春は何が食べた…い！？」

キッチンに立つて料理を作っていた峰斗は、目の前の状況に言葉を失つた。

「2人はなにしてるのかな…？」

「峰斗君の恥ずかしい秘密を探してるんだよ、それにエッチな本とかありそうだし」

うんポチのお昼ご飯にイタズラしてやろつシー

「で春は俺のパンツになにしてるの…そんなに俺のパンツは珍しいかな？」

「いやあ男の子のパンツってこうやつたとかあって思つて…」

「春も男の子だよね？つてもういいや…2人ともご飯ができるまでに片付けてなかつたらお昼抜きだから」

まあ本当にお昼抜きにはしないんだけどね、とりあえずこう言わないと片付けなさそうだし…。

そして一時間後お昼ご飯を作り終わった峰斗は3人がいる部屋に料理を運んでいた。

「ちゃんと片付てるね、でも片付けかたが適当な気がする…」

「そんな事ないよ…峰斗君が置いてた所にちゃんと片付けたもん」「そうばい、ちゃんと峰斗のパンツあつた場所に直したし」「うんもう面倒だからいいや…とりあえず座つて？今持つて来てるので最後だから」

峰斗が3人に言いながら最後の料理を置くと3人は、田の前に置かれている料理を見て目を輝かせていた。

「これ本当に峰斗君が作ったの？冷凍食品とか昨日の『』飯の残り物とかそんなんじゃないの？」

「失敬な…ちゃんと作つたよ、そんなに俺が料理できないように見えるのかよ」

「ミィ君は料理作らないように見えるからねえ、まあ見えるだけで本当は普通に作れるんだけどね」

「美緒の『』飯無しにしようかなあ…うんそれがいいねッ！」

「駄目だよお昼抜いたらミィ君との大人のスポーツができなくなるから」

「エスパーか！？つてもつこれ飽きたからやめよっ…それと絶対にしないからな？」

「ええ何でえ！？私ミィ君に初めてをもらつて貰う為に誰ともしてないんだよ…まあミィ君以外とする気なんてないんだけどね」「美緒は、俺とどんな関係になりたいんだよ…？」

この返答しだいでは部屋に鍵をつけよう…俺の貞操を守る為に。

「それは恋人？いやお嫁さんかな、それで毎日ミィ君と大人のスポーツを…へへへ」

アウトおツー絶対部屋に鍵かけよ…。

「じゃあ美緒は『』飯抜きといつことで、それ以外の人はたべようか？」

「うんッ…もうお腹空いて倒れそうなんだよう…」

「僕もお腹空いて力がない…」

「じゃあたべようか、とりあえず嫌いな物があつたら食べなくていいから」

峰斗がそう言つと同時に3人は目の前に並べてあるサンドイッチやそれ以外の料理を食べ始めた。

「ねえ峰斗、僕が食べんやつたぶん家に持つて帰つてよか?」

「別にいいけど、でも急にどうしたんだ?さっきまであんなにお腹空いたつて言つてたのに全然食べてないし」

峰斗の言つ通り春は、目の前に並んでいるサンドイッチを2つしか食べていないので。

「いやあ僕だけこんな料理食べて家に帰つたら妹達に悪かと思つて」

「ははは、と笑いながら春は言つてはいるがその表情は悲しさ半分妹達に申し訳なさ半分つて感じの顔をしていた。

「なあ美緒、今日皆で入学祝いのパーティーしないか?」

「あつミィ君の顔がこんなに近くにつていきなりどうしたの?」

2人は顔をかなり近くして他の2人には聞こえないように話していだ、そしてそれを見たポチは顔を引きつらせながらどす黒いオーラを出してはいた。

「いやなんか春のあの顔見てたらなんかしてやれないかなあつて思つてさ…」

「でも春君はそれを望んでないかもよ?それでもいいの?」

「それなら普通のパーティーをするから来てくれつて言えばいいだろ?」

美緒はしばらく考えると頷きながら話し始めた。

「今日春君と、ポチちゃんは夜暇?」

「暇だよ?でも急にそんな事聞いてどうしたの?」

「僕も暇ばい、今日は特に用事なし」

それを聞いた美緒は峰斗を見て頷き頷き返した峰斗は急にその場に立ち上がった。

「じゃあ今日は、皆で入学祝いのパーティーをしますッ!」

「やつたあッ!パーティーだ、でも今日にどうしたの?」

「いや新しい友達も出来たしポチにもまた会えたし、それに今日入

学したしちょうどいいかなあつて思つて」

まあ春のこともあるからなんだけそは内緒つてことで。

「ちょっと待つて、もしかして僕に同情してそんな事言つよると？」

それならツー？」

何か言おうとした春の唇に峰斗は人差し指を当てて遮つた、そして耳元で他の人から聞こえないように何か呟くと春の顔は真っ赤になり「クククと峰斗が何かを言つたびに頷いていた。

「まさかミイ君が男の子を堕とすとは…」

「天然ジゴロだね…はあ何人ライバルが増えるんだろう?」

「さつご飯の続き食べよつか?つてなんで呆れたような目で俺を見るんだよ!？」

春に何かを言い終わつた峰斗が視線を感じて2人を見てみると2人は溜め息をつきながら自分の事を見ているのに気づき狼狽えていた。「はあミイ君は自分が何をしたかわかつてないみたいだね…」

「そう例えば一人の男の子を堕としたとかね?峰斗君は何人ライバルを増やすんだろうね…」

「意味わかんないから…ほら早くご飯たべようよ、春も遠慮せずに食べよ?」

「ひやつひやい!?

急に話を振られた春は顔を真つ赤にしながら変な声を出していた…。

「なんだよそんなへんな声出して…まあいいやとりあえず食べよ」

そして一時間後ご飯を食べ終わりポチと春の2人は玄関で帰る準備を始めていた。

「じゃあ夜の入学祝いのパーティーの時にな?」

「うんツー!じゃあまたパーティーの時に会おうね」

「まつまた夜にね?あとご飯美味しかったばい」

「それは良かつた、じゃあまた夜なツー!あと春は妹達も連れてきていいからな?もちろんお母さんも」

顔を真っ赤にしながら頷くと鞄を持って春は玄関からとびだした。

「あつ春君先に行っちゃた…じゃあバイバイツー!」

ボチもそういうと春を追いかける為に玄関からとびだしていった。

モデルの沙織さんにお金を出したもひつて

「お金を出すのはいいけど条件がありますッ！」

「なつなんだよ…俺のできる範囲でなら別にいいけど」

「条件は私の唇にキスをやる事ですッ！」

「……」
「わかつたじやあ田を瞑つてくれ恥ずかしいから、

「えつ本当にしてくれるのー? やつと私の初めてを!!」君がもうつてくれるんだね

目の前にいる美緒が目を瞑つたのを確認すると峰斗は美緒にバレン
いようにキッチンにある冷蔵庫から必要な物を取り出して美緒の目
の前に戻つた。

「行くぞ？ やるからな……」

「ああ私とミィ君がキスしてるう、でも何か生臭い…何でだろ?」
恐る恐る田を開けてみるとそこには峰斗の顔じゃなく魚のキスが自分の唇にキスをしていた。

「ハヤ君、これはどういった事かな……？」

「え、魚のキスだけど？ だって唇にキスをやってくれって言ったか

「ははは、私の初めては魚のキスなんだ…ははは」

美緒はよほどショックだったのか部屋の隅に座り込んでしまった。

美緒さんは薄か遠慮な、それに初めては母さんが夕さんだと思つぞ？つて待てこの前美緒にキスされたぞ！？つて事は初めてじ

せんじじやないな

「違うう好きな人からキスされるのは初めてなの…まあ私からだつたら毎日してたんだけど」

「ちょっと待て毎日してち

う事が説明して「さあ早くパーティーに必要な物を買いに行こ」つづ
！「おい待てッ！」

美緒は、逃げるよつに外に出ていつてしまつた…。

「財布も持たず」にどうやって買い物するんだよ…まあしょうがないから財布持つて美緒を追いかけるか

その頃春は、妹達と母親をリビングに集めて自分の前に座らせていた。

「春、何で皆を集めたのかしら?」
「飯作らないといけないから忙しいんだけど」

「今日はご飯作らなくていいばい」

「春、夕飯を作らないでいいってあなたは私達に空腹のまま夜を過ごせと言つのかしら…?」

母親が言つ事に妹達は、親の仇を見るような殺気がこもつた目で春を見込んでいた。

「ちつ違つ! 夜ついてきてほしか所のあるつたい

「空腹のまま私達を歩かせるの? 春はいつからどうの鬼畜になつたのかしら?」

「だから違つて言つよるやん… とりあえず夕飯は作らなくていいから

「まあそこまで言つなら作らないわ… 何か理由がありそつだしさ」

その頃ポチはと黙つと…

「あらあヒメ今日はご機嫌ねえ？もしかして探してた王子様が見つかったとかあ？たしかヒメの事をポチつて呼んでいたのよね」

「うん同じ高校の同じクラスになつて席も隣どうしねのッ…それに今日の夜パーティーに呼ばれてるの」

「あらあら適当に言つたのに正解しちやつた、でもそれならメイも行きたがるんじゃないかしら？」

メイはヒメの一つ上の姉で同じ高校に行つて、それにヒメも峰斗に助けられたがメイも峰斗に助けられていて姉妹で峰斗の事を探していたのだ。

「ああお姉ちゃんか…内緒で行きたいんだけどなあ
「私に何を内緒にして行くのかな？」

「いっいやちよつとコンビニに行つてこようかなつて思つて」

「違うでしょヒメ？王子様が見つかったのよメイとヒメが探してい
た王子様がね、それでヒメは王子様にパーティーに呼ばれたんだつ
て」

「ふうん…見つかった上に家にお呼ばれねえ」

ああどうしてお母さんはお姉ちゃんに言つちやうのよ…せつかくバ
レズに行けると思つてたのに。

「でも残念今田は宿題がたまつて行けないの…ああ早く私の王子
様に会いたいのに」

「峰斗君はお姉ちゃんの物じやないよッ！それに強敵がいるんだか
ら」

「その強敵つて誰なの？私の知つてる人？」

「ふふ、お姉ちゃんにこれを言えばびっくりして変な顔になるかも…
うん言おうッ！」

「お姉ちゃんが一番好きなモデルさんつて誰？」

「いきなり何よ？まあ好きなモデルは沙織よつて知つてるでしょ？」

「うん知つてるよ、まだ気づかないの？ここまで言えばわかると思

うんだけど……」

「まさか……でもそれじゃあ勝ち田がないよ？何でヒメはそんなに余裕なのよ？」

それは沙織は峰斗君の家族だからなんだけど絶対にお姉ちゃんには教えないッ！

「まあ私はお姉ちゃんより色々知ってるから、まつ王子様は同じ高校に通つてるから探してみるとこよ、明日で一年生の教室を覗いてみれば？」

「一年生なのね？絶対に明日の内に探し出すよ、じゃあ私は明日の為に宿題をやつづけてきますッ！」

「じゃあ私は夜まで色々準備していよっかな？」

はあどんな服着て行こうかなあ……峰斗君に可愛いって思われるような服つてあつたかな？まあちゃんとした服着ればいいよね？はあ夜が楽しみ

第四話パーティー～春の秘密と理性崩壊？（前書き）

ちょっとH口くなっちゃいました・・・
でも大丈夫いつもと変わらず駄文です！
後々でいいので感想ほしいかもです。

第四話パーティー～春の秘密と理性崩壊？

ピンポーン、ピンポーン

呼び出し音が部屋の中に響く。

「あつミィ君来たみたいだよ、ヒメちゃんかな？それとも春君？」

「まあ玄関に行けばわかるぞ、もしかしたら2人一緒かもしれないし」

「じゃあ賭けようよ、私はヒメちゃんだけ來てると思つー。」

「じゃあ俺は2人+春の家族で、早く行こうぜ」

美緒と峰斗は、2人で玄関に向かつた。

「よつしゃッ！俺の勝ちだな、そして美緒の負け」

勝ち誇ったように言うと美緒は頬を膨らまして拗ねていた。

「峰斗君こんばんは、ただいまポチ参上いたしました」

「えつとこんばんは、僕と僕の家族も一緒に來たばい」

ポチは笑顔で敬礼しながら春は顔を赤くしながら挨拶してきた。

「こんばんは、春の家族の方は初めてまして春の友達の武原峰斗です
第一印象をよくする為に120%の笑顔で挨拶をする。

「ああ久しぶりにミィ君の120%の笑顔を見たよ、そしてこの笑顔を見たら…」

「ほらお母さん峰斗に挨拶せないかんばい？」

「へつ？あつああ私春の母親で桜つて言います、桜つて呼んで下さいね？」

「はいじやあ桜さん立ち話もなんですから中に入つて下さい、そこに隠れてる2人もね」

峰斗がそう言うと玄関のドアの近くから2人の女の子が出てきた。

「こんばんは、俺の名前は峰斗2人の名前は何て言つの？」

「こにでも怖がられないように120%の笑顔で自己紹介をする。

「みつ美晴です中学三年生です、よよよよろしくお願ひしますッ

！」

「うんよろしくね！」

美晴の頭に手を起き撫でると顔が真っ赤になつて、きらりと自分の母親のほうに倒れてしまった。

「ありや大丈夫？じゃあ君の名前は何ていうの？」

「わつ私は夏紀です中学一年生です、よつよろしくねお兄ちゃん」

「おつお兄ちゃん！？」

やつやばい可愛い女の子からお兄ちゃん何て死ぬッ…。

「ミイ君大丈夫？まさかお兄ちゃんって呼ばれただけでこんなになるなんて…」

美緒の前には体を震わせながら立つている峰斗がいる。

「えつ？なつ何で人気モデルの沙織がここにいるの！？」

今頃美緒の事に気づいた美晴が大声で叫んでいた。

「ミイ君の妻の武原美緒です、よろしくね美晴ちゃん」

「つつ妻何ですか！？そつそうだよね峰斗さんカツコいいもんね中学生の男子じゃあ足元にも及ばないくらい…」

「なにが妻だ、ごめんね美晴ちゃん」いつは双子の姉の美緒妻じやないから

「そつそつなんですか？よかつたあ…」

「じゃあどうぞ中に入つて下さい狭いかもしれませんが」

峰斗が玄関で立つている5人に言うと5人は靴を脱いで中に入った。

「さつ美緒も突つ立てないで行こうぜ、ほとんど料理は出来てるけどもうちょい作らなきゃいけないし」

「この天然ジゴロのたらしミイ君…」

「意味がわからん…ほら行くぞ」

美緒の手を掴んでリビングに行くとそこにはテーブルに並んでいる料理を見て驚いている5人がいた。

「あつあのどうしたんですか？そんなに俺が作った料理がおかしいですか？」

「えつ峰斗君が作ったの！？」

「まあ一応この家に料理作れるのは俺しかいないんで」

「峰斗君って凄いのねッ！でも何かショックかも…」そう言しながらもどこか嬉しそうな春の母親を見て皆は笑っていた。

「じゃあ俺もうちょい作るのあるんで適当にくつろいでてください」「あつ私も手伝うわよまあ峰斗君みたいに上手くはないけど…」

「ありがとうござります、じゃあ桜さんはサラダ作つてもらえます？」

「任せなさい、サラダなら余裕よ」

2人は笑いながらキッチンに行ってしまった。

「ねえ春君、まさかとは思うけどお母さん…」

「多分そのまさかだと思つ…お父さんがいなくなつて男の人に関わらなくなつとつたのに」

「はあ…まさか友達の親までとはね、ねえちょっと見に行かない？なんか嫌な予感がするんだよね」

「嫌な予感？まあそんなに気になるなら行ってみようか」

そう言つて5人は、峰斗と春の母親がいるキッチンに向かつた。「つうんやつぱり近づくに連れて嫌な予感が強くなつてる…」

「とりあえず静かに覗いてみようよ」

「そうばい、じゃあ先に僕から見てみる…ばい！？」

「ちょっとどうしたの？」

「いっいやちょっと僕の口からは言こにくかとか…」

「ちょっと私にもミィ君を見せて」

美緒がドアの前に立つ春をぞけてキッチンの中を覗いてみるとそこには春の母親を抱きしめながら耳元で囁いている峰斗と顔を真つ赤にしながら頷いている桜がいた。

「ななな、何でえ！？何でミィ君が春のお母さんを抱きしめてるの？」

「えつ！？ちょっと私にも見せてッ！」

その後ポチと美晴それから夏紀もキッチンを覗くと皆同じ反応で叫んでいた。

「ちょっと私やめさせてくるッ！」

「私も行くッ！ていうかもう全員で行こうよ」

「ポチがそう言つと皆頷きキッチンに入つていった。

「ちょっとミィ君ッ！何で春君のお母さんを抱きしめてるのよ、抱きしめるなら私を抱きしめなさいッ！」

「それが嫌なら私でもいいんだよ？峰斗君のペットだしね」

「峰斗さんなら私抱かれてもいいですッ！あつ…抱かれてつてゆうのは抱きしめるつて事ですよ」

「私もいいよお兄ちゃんならいくらでも抱きしめていいよ？」

「いきなり入つてきて意味がわからない事を言つ4人に峰斗は困惑していきた。

「「「「さあどうだッ！いつでも抱きしめていいよ」「」」」

「そう言いながら両手を広げて峰斗に抱きしめられるのをまつ4人。「いや抱きしめないよ？それに皆勘違いしてるけど俺桜さんに野菜の切り方教えてただけだから」

「本当に私達の勘違い？うわあ恥ずかしい…」

「ほらわかったならキッチンから出て行つて」

峰斗が顔を赤くして俯いている4人に言つと逃げるようにキッチンから出て行つた

「さつ作りましょうか、つて顔が赤いけじ大丈夫ですか？」

「だつ大丈夫よ、早く作りましょう皆お腹空いてるでじょうし」

「できたよつて何してんの！？」

「ミィ君の部屋を物色してたら元カノの写真が出てきたから皆で見

てたの」

「えつ？全部捨てたはずなのに何でまだ残つてんだよ…」

「まあ別にいいけど、でも何で彼女いたの隠してたのかな？」

どす黒いオーラを出しながら近づいてくる4人に顔をひきつらせながら後ろに下がる峰斗。

「春ツ！助けてくれ、助けてくれたら何でも聞いてやるから」

「本当に聞いてくれるん？」

「絶対に聞くから早く助けてくれツ！」

春は頷くとすぐに峰斗と4人の間に立つて両手を広げた。

「皆いい加減やめんばい？それにお腹空いたし」

「それもそうね、とりあえずやめてあげる…」

「とりあえずじゃんけんしましようか？峰斗君の隣に座れる権利をとるために」

「私は絶対に勝つわよ？じゃあやりましょうか」

じゃんけんの結果峰斗の隣に座る権利をとったのはポチに決まった。

「やつたツ！峰斗君の隣に座れるう」

「まあ今回は譲つてあげる…あつ1人座る場所がないわね」

「そうだね…じゃあ美緒は立つたまま食べるところ」として

「えつ…?ミイ君がひどい…」

「嘘だよ、そうだツ！夏紀ちゃんちょっとこいつちに来て」

峰斗は、夏紀が近くに来ると夏紀を抱えて自分の足の中に座らせた。

「へつ？おおおおお兄ちゃん！？」

「座る場所がないならこれで座れるじゃん？」

「羨ましい…私もミイ君の足の中に座りたいツ！」

「私も座りたいです…夏紀私と変わってくれない？」

夏紀は首を横に降つて変わるのを拒むと峰斗に体をあずけた。

「夏紀ちゃん恐ろしい子ツ！」

「ねえ結局今日は何をする為に集まつたの？私は春についてくるように言わってきたから知らないのよね」

「今日は入学祝いのパーティーですよ」

「えつ そうなの！？じゃ あ後でお金を渡さないと」

峰斗は首を横に降りながら話はじめた。

「お金はいりませんよ？俺達が勝手にやつてるパーティーに皆を呼んだだけですから」

「でつ でもそれじゃあ何か悪い用な気がして」

「じゃあ今度桜さんの作った料理を食べさせて下さい、それで今日のはいいですから」

満面の笑みで言う峰斗に少し見とれてしまつた桜だが我にかえつて渋々ながらも頷いた。

「ほら食べましょっツー・皆もお腹空いてるだろ？」「そうね、じやあ今日は！」馳走になります

「じゃあいただきますツ！」

峰斗は自分が作った料理を皆がどう思つか見ていたが美味しそうに食べるのを見て安心した。

「はあ 何かクラクラする…まさか美緒の奴酒でも買つて出してたのか？」

峰斗は自分の部屋にもう一つ布団を敷きながら一人呑んでいた。

コンコン

「僕も手伝うばい？それに僕以外寝ちゃつて暇だし

「そうなのか？やつぱり酒でも混ざつてたのかな…春はクラクラしたりしてないのか？」

「うん、僕はお酒強いから飲んでも大丈夫やし」

「そつかじやあとりあえず布団は全部敷いたから畳を空けてる部屋に連れて行こ!…」

そして10分後寝ている5人を布団まで一人ずつ連れて行き春と一緒に自分の部屋に戻った。

「ねえ何でもお願ひ聞いてくれるつて言つたの覚えどる?」

「ああ覚えてるよ、でも俺ができる範囲で許してくれよ?」

「うん、じゃあちょっと後ろ向いててくれん?」

「何するんだ?まあとりあえず後ろ向いとくよ」

後ろを向いてすぐに服を脱ぐような音が聞こえてきて音がしなくなつたと思うと後ろから抱きつかれた。

「おっおい?何してんだよ!?」

「僕からのお願いは僕の初めてを貰つてほしいんだ…」

「俺に男とするなんて趣味はないぞ!…それに今日会つたばかりで何でそうなるんだよ?」

「僕が峰斗の事を好きだからに決まつたるやん、あのナルシストに回し蹴りした時に初めて峰斗の事を見てからずっと胸がドキドキしどるんよ」

「とりあえず服を着てくれ…話しさそれからだ!?」

後ろを向いて春を見るとそこにいたのは胸にサラシをまいている春がいた。

「何でサラシをまいてるんだ?それにお前ついてない…」

「僕男の子が苦手でわざと男の子の格好をしてるんだよ…僕いや私は正真正銘の女の子ばい」

「マジか…春は女の子だったのか、まあ別に女の子って言われても信じちまつような可愛い顔してるしな」

「うん、だからさッ!私の初めて貰つて欲しいっちゃん

春は峰斗をベッドに押し倒して馬乗りになつた。

「私ねサラシを巻かないといけない位胸が大きいんだ…峰斗は胸が大きい子は嫌い?」

「いや好きだけど…ちょっと待ってくれつてサラシをとるなッ!」

やつヤバい理性がいつ崩壊してもおかしくないぞ…それも春から甘い匂いがするしお酒も飲んでるみたいからマジでヤバい。

「どうかな私の胸峰斗の好みかな？それともやつぱり大きい？」

春の胸Eは絶対にあるって何真面目に見てるんだよ…本当に理性が崩壊しちまう。

「ねえ峰斗、私の初めて貰つて？本当に好きなんよ」

「だから今日初めて会つたばかりなのにこんな事は、んぐー…？」

峰斗が全部言い終わる前に春の唇で止められてしまった、そしてその時ギリギリ保っていた峰斗の理性が音を立てながら崩れた。

「本当にいいんだなつと、春のせいで理性が音を立てながら崩れたよ」

理性を保てなくなつた峰斗は自分の体に馬乗りになつている春を自分が上にくるようにベッドに押し倒した。

「うんいこばい、私の体と心はもう峰斗の物やけん」

「じゃあやるからな？止めるならいまだぞ？」

「ちょっと待つてもう一回キスしよ？さつき私が無理やりしちゃつたから次は峰斗からしてほしか

「わかつたじやあやるからな？」

どんどん近づいて行く峰斗と春の唇そして距離が零になつたとき完全に一人の理性は崩壊してどんどん激しいキスになり互いを求めながら夜はふけていった。

第五話後悔?～パッシュ?（前書き）

途中自分で勢いでかいてるなあつておもつたり・・・

第五話後悔？～プリシン？

朝携帯のアラームがなり起きた峰斗は複雑な表情をしていた。

「春がない、って事は昨日の事は夢なのか？」

自分の部屋を見渡すと机の上に紙を見つけ手にとり読みはじめた。
『もう起きたかな？僕いや私は一回家に帰つて制服に着替えてから学校にいきます

PS、昨日の夜は激しかったね』

「だよなあ…だつてベッドのシーツに血もついてるし見てできねえよ

手紙とベッドのシーツを見ながら今さら後悔する峰斗、その姿を見られていたのも知らずに…。

なつなんですと！？気まずいし恥ずかしい…どうして俺は昨日あんな事をしてしまったんだ！？

ピンポーン、ピンポーン

「あつ春君かな？それともヒメちゃんかな？」

「ほら早く本当に遅刻してしまいますよ？」

「そうだよな…昨日の夜の事は春から頼んできた事で俺が無理やりした事じやないんだから堂々としてればいいんだ、うんそうだ！」

「よし行こう覚悟は決めた、俺は堂々としてる」

「何の覚悟？今日のミィ君ちょっとおかしいよ」

「いいから行くぞって何か外が騒がしくないか？」

「たしかに…ヒメちゃんがなにか叫んでるみたいだね、気になるから早く行こうッ！」

先に出た美緒を追うように家の外に出るとそこには、なぜか昨日とちがう女子の制服を着て軽く化粧をしている春がいた、その姿はまさに美少女10人に聞けば10人が可愛いと言うレベルだ。

「何で春くんが女の子の格好をしてるの！？まさか峰斗君の事が好きだから男の娘になっちゃったの？」

ポチ、春は正真正銘女だ…それはもう立派な武器をつてなに考えてるんだ俺。

「僕いや私はれつきとした女やしほら証拠にこの胸見てよ、ちゃんと柔らかいとばい？」

「むつ確かに柔らかい、って事は本当に女の子！？」

美緒が本当に触りやがった…でも確かに柔らかかつたなつてまた変な事考えちまた。

「それに何か昨日と違つて大人になつたつて感じがする…ねえなんで？」

「あつヒメちゃんも感じたの？私もさつきから大人つていうか何か一皮剥けたつていうか何か色っぽいというか」

女の子同士はそんな事までわかるのか？あつ春が俺を見つけた瞬間

笑顔になつた。

「おつおはよつ峰斗、どうかな似合つとる？僕じゃなかつた私自信なくて…」

「似合つてると思つよまさしく美少女つて位可愛いしな、あと僕つていいやすいならそれでいいんじやない？俺は僕つ娘好きだぞ？」
「本当に！？じゃあ今まで通り僕つていおうかな、じゃあ…ん！」
「なに？両手を広げて朝のハグですか、いや違うこれは朝のキスだ…
つてこんな所するのか？美緒もポチもいるのに。」

「あつあのなキスは好きな人とするものでだな友達同士するものじゃないんだ」

「わかつてるよ、だから好きな人としようとしたやん？それとも昨日は数え切れないくらいキスしたのにまだ恥ずかしいの？」

「それに美緒やポチもいるし、ちょっと人前では恥ずかしいかなあつて思つたたりして」

「峰斗は恥ずかしがり屋なんだね、じゃあこれからは僕がキスしたい時は僕からするつて事で」

飛びつきながら自分の唇を峰斗の唇にくつづけるとすかさず舌をいれ普通のキスから「ティープキスに変わつた、しかしそれを許さない者が二名ほど」。

「春くん私も普通のキスまで我慢してるので何で舌までいれてるのかな？」

「私にいたつてはキスすらした事ないのに春くんするいッ！」

「ふはつて春お前なあ…もういやそんな笑顔の奴に何も言えねえよ」

「えへへ朝から峰斗とキスしちゃつた、峰斗とのキスは甘い味がするよ」

「そんなに甘いのか？朝は甘いの食べてないんだけどな…」

「ねえ峰斗君、私だけキスできていんだけど…」

「そりやあキスするタイミング何てなかつたからな…」

「ねえキスして？私にもキスしてくれたら春くんみたいに変われる

よつな気がするんだ…」

「えつとまじですか？それに変わるつじどう変わるの？」

ポチは額き眼鏡を外し前髪をピンで止めると中からは「これまた美少女が…

髪をちゃんと切つたら今以上に可愛くなるんだうつな、そしたらクラスの男子いや学校の男子は黙つてないだうつな…。

「キスして？私も峰斗君にキスして欲しいの」

「ミイ君、女の子にここまで言わせてやらないとか最低だよ？男ならさりさとやりなさいッ！」

「わつわかつたよ…本当にいいんだな？後悔するなよ？」

ポチが頷くのを確認すると峰斗は優しくキスをした…そこまではよかつたしかし急に舌が自分の口に入つてきたのだ。

「ふはつポチお前まで舌をいれるのか！？」

「春くんには負けたくないから…それに春くんがいう通り甘かつた」

「ミイ君、私にはしてくれないの？」

「双子でキスとかありえないッ！けどそんな悲しい顔してるなら今日だけ特別にしてやるよ…言つとくけど家族のふれあい程度だからな？」

峰斗はそう言つと美緒の唇にキスをしてすぐ口に離れた。

「ああなんか俺が節操なしに思えてくる…これからは自重しよ」

「峰斗が自重しても僕から一方的にキスするから意味ないばい」

「私も峰斗君が自重してもキスするから意味ないよ」

「私はミイ君が寝てからするから大丈夫ッ！」

まさかこれはハーレムという奴では？つておれはハーレム作りうつ向て思つてないんだけどな…。

峰斗は一人で教室にいた、いや正しくは回りを何人かの女子に囲まれながら。

さあ春とポチをみた男子の反応はどれだけなんだろうなあ…。峰斗は、春とポチに自分の後から来るように言つて一人先に教室に来ているのだ。

「おっおい美少女2人がこっちに向かつて歩いて来inゼッ！」

1人の男子が春とポチを見たのか凄い形相で教室の中に入ってきた。「どつどんな子なんだ！？どこのクラスかわかるか？」

「1人は生徒会長に負けない位可愛くてもう1人は小さいけど胸がでかい可愛い娘だッ！クラスはわからないけどな」特徴を他の男子に伝えると一気に騒がしくなった。

「うわ男子最低…武原君はあんなにならないよね？」

「うんならないよ、えつと名前は？」

「あつわたし莉子つて言つんだ、一応学級委員長してます」

「おお委員長かすげえな、つて何で俺の名前知つてるの？」

ええ何でそんなに引かれてるの！？俺おかしい事いつたかな？

「あのね、今学校にいる女子で武原君の事を知らない人はほとんどいないよ」

「そうなの？何か俺悪い事でもしたかな？」

「いや良い意味で知つてるの、つて自分の顔を鏡で見ればわかるよ」「うんとりあえず休み時間にでも見てみるよ」

峰斗がそう言つた瞬間教室の中が一瞬静かになり一気にさつきよりも騒がしくなった。

「うわつなにあれ超可愛いんだけど…？俺今彼女いないし狙つてみようかな」

「いや俺は彼女いるけど狙うぜッ！何か武原つて奴の事が気になつてるみたいだし…」

えつ俺！？俺のせいでそんなに落ち込んでんの？うわあ氣まずい…。

「まあ狙うのは男子全員みたいだけじよ、あんな美少女2人いこのクラスにいなかつたよな？」

「そりだな、確かに昨日はいなかつた…でもいーじやんツー・可愛い子は大歓迎だし」

「そりだなあと言いながら頷く男子たち、そしてその男子の中から飛び出すのが何人か。」

「名前何て言つの？よかつたら友達にならない？あとメアド交換しようよ」

「昨日まで私の事地味とかねぐらとかバスとか言つてたのによくそんな事が言えるね？あと私から好かれた人は最悪とか言つてたし」

「おいツー！誰だよこんな可愛い子にバスとか言つたやつ、あと可愛い子に好かれて最悪な奴何ていだろ」

「お前だよお前…まあポチつて気づいてないから仕方ないけど」

「君は名前何て言つの？俺は「別に聞いてないっちゃけど」」

「おお春にいたつては最後まで言わせないと来たか、なかなか面白いな今この状況。」

「俺はそんな事思つてないからさメアド交換しよ「絶対にいやツー…うう」

「あつ落ち込んだ、やっぱい楽しい俺つて意外といつひつひの好きなのかも。」

「ねえ俺今彼女いないんだけどよかつたらわき合わない？」

「ごめんけど君見たいな中のトジヤあ僕の旦那さんには敵わないよ？」

「？」

「旦那さん…？まだ結婚していないんだろう？なのに何で旦那さんとか言つてるんだよ、あれだろ俺を拒む為の嘘だろ」

「じゃあ今から証明してあげる、君じゃ敵わないってすぐわかるよあれ近づいてくる、でもなんだろ嫌な予感しかしない…。」

「みつ峰斗おはよ、なんか凄い事になつちやつた」

「まあ普通だろうな、だつてお前ら可愛いし男子があんな風になるのは仕方ないと思つよ」

「かつ可愛い！？そつか峰斗も可愛いって思つてくれてるんだ、嬉しかばい」

ちよつと待て何故顔を赤くしながら近づいてくるんだ！？ほつ本当にまつてくれ

顔を真つ赤にしながら近づいてくる春に頭を掴まれ逃げれなくなつた峰斗はあつけなくキスされてしまった。

「ふはっじゃああらためまして、おはようございます未来の旦那様」

「未来の旦那様！？何で俺が旦那なわけ？色々はしょりすぎだろ」「僕昨日初めてだつたのに峰斗つたら激しいし中に出しちゃうし責任とつてくれるよね？僕峰斗のせいでHな体になつちやつたんだよ？」

「あつあれは春から頼んできたんだろ！？」

「僕はあんなに激しいと思わなかつたし中に出していい何でいつないよ？」

うつ確かにあれは激しくしそぎたような気がする…。

「僕今も峰斗にしてもらつたくて疼くんだよ…ああ妊娠したりビリしよ」

「わつわかつたよ責任とるよ…だから離れてくれ」

「もう峰斗つたらそんなに恥ずかしがらんでもいいやん」

「周りを見てみろよ…こんな所であんなに近づかれたら恥ずかしいだろうが」

まあ8割お前が言つ事で恥ずかしいんだけどな…ってポチはなにじてるんだ？

「ねえ武原君はこの人と付き合つてるの？」

「莉子ちゃん顔真つ赤だね、俺と春は付き合つてるの？」

峰斗は困つてそのまま春に聞いてみた。

「うんまだ付き合つてないけど友達よりはかなり上の関係だよね」「そつかよかつたあ…あつよかつたらメアド交換しない？」

「別にいいよ、じゃあ休み時間に交換しようつか

さつポチはなにしてるのかなあつて囮まれてるなあ多分春が俺にキスしてべつたりくつづいてるからポチに全員行つたんだな。

ポチ side

「なあメアド交換しようよ、てか彼氏いるの?いなになら俺と付き合つてよ」

「私好きな人がいるから無理それにあなたと付き合つたらそつゆう事もするつてことだよね?私あなたに体を触られると思うと悪寒じかしない」

「大丈夫、最初は痛いだろうけどすぐ気持ちよくしてあげるし!それに俺経験者だから安心してもいいよ」

峰斗、春 side

「ねえ峰斗、初めてつて痛かと?僕あんまり痛くなかったっちゃけど」

「ああそれは痛くないようにしたからつて言わせんなよ恥ずかしい」「あははそつか峰斗は優しくしてくれたんだ!」

「つるさい、それに抱きつくな恥ずかしい」

「むうう未来の奥さんにそんな事言つたらダメなんだよ?」

「こは無視だ無視いちいち付き合つてたら恥ずかしすぎる。」

ポチ side

「なつだから安心して付き合おうよ!絶対に痛くしないから」

「無理、あなた盛りがついた犬みたいだね…それに私はあなたと付き合つ気はないし」

「なつ何だと!/?俺と付き合つ氣がないだと少し顔がいいからつて調子に乗りやがつてッ!」

ポチに迫つていた男がポチにビンタをしようとして手をふつて躊躇いなく叩いた。

「ははは、俺に歯向かうからビンタされるんだよッ!これにこりた

ら俺と付き合'えよ」

「痛たいなあ…でもポチが叩かれなかつただけましか、とりあえずお前は覚悟しろよ?」

ポチ side (心の中)

はあ何で私が峰斗君以外の人に告白されないといけないのよ…。

「なつだから安心して付き合おうよシ一絶対に痛くしないから何で私があなたとやる前提で話してゐの?私は峰斗君以外とは絶対にやらないのに。

「無理、あなた盛りがついた犬みたいだね…それに私あなたと付き合おう気ないし」

「なつ何だと!?.俺と付き合つ氣がないだと?.少し顔がいいからつて調子に乗りやがつてツ!」

ああこの人全然峰斗君と違う…叩かれるんだ顔は嫌だな、峰斗君以外に体を触られるも嫌だし叩かれるのもやだ…峰斗君の所から私の所まで遠いしこのまま叩かれるんだ、嫌だよ峰斗君助けてよ叩かれたくないよ。

「痛いなあ…でもポチが叩かれなかつたからまだましか、とりあえずお前は覚悟しろよ?」

あれ峰斗君の声が聞こえる、それに顔が痛くない叩かれた音はしたのに何で?

ポチは目を開けて目の前の光景を見て驚いていた。

「なつ何で峰斗君がここにいるの?ここまで遠いから間に合わないはずなのに」

「まつそこら辺は春にでも聞いて、とりあえず俺はポチに手を出そうとしたやつを…潰すから」

ポチは、無意識のうちに体が震えていたそれは多分峰斗がだす目の

前の男に対しての殺氣…でも思つ私の為にこんなになつてるのは嬉しいと。

「あまり無理しないでね」

ポチはそう言つと急いで春の方へ歩いていった。

「何だ武原か、お前も顔がいいからつてあまり調子にのるなよ？」

「黙れ、お前は俺の友達に手を出そうとしたそれも女の子にな…」

「だったら何だ？俺は俺に歯向かう奴が大嫌いなんだよ、それが女でもな」

なんだこいつは、こんな奴がポチに迫つて断られたら手を出さうとした？許せない。

「お前なに震えてんだよ？まさかビビッてんのか？ビビッてるなら助かる方法を教えてやるよ」

「助かる方法？言つてみろよその方法とやらを」

「まずお前が俺のパシリになる事、そしてあの胸がデカい女を俺に差し出す事だ」

はは、こいつは最低な奴だな…何だろ？こいつを見るとあの時の血が騒ぐ。

「それに俺はチームにも入つてんだぜ、CROWってチームだ知つてるだろ？ここら辺じや最強のチームだからなッ！」

CROWと聞いた瞬間峰斗がかすかに反応したのに気づいた男はたたみかけるように話しあじめた。

「俺に手を出せばCROWが動くぜ、何せ俺はCROWの幹部の樋口さんに可愛いかられてるからな」

「じゃあその樋口つてやつ呼んでみろよ今日も学校は午前中で終わるから昼に相手してやるよ」

「はつビビツがツーどうせ逃げようつてこんたんだろうが俺は絶対に逃がさないぜ」

「誰が逃げるかよ、絶対に樋口つて奴呼べよ…そして後悔しない」

最後の方は、誰にも聞こえないよつて呟いた。

「峰斗君ッ！私のせいでごめんね……でも何であんな事言つたの？」
ROWって私でも知つてゐ位凄いんだよ

「僕もこっちに來たばかりだけど知つとる…ねえ峰斗、無謀だよ僕
は峰斗の傷つくところは見たくないッ！」

「まあ大丈夫だ、ありがとな2人とも心配してくれたんだろ？」

峰斗が2人の頭を撫でながら言つと、2人は顔を真つ赤にして俯いてしまつた。

「あつあの私も一緒に行きますッ！もし危なくなつたら警察呼びますから」

「うん莉子ちゃんもありがと、でも危ないかもしねりによ？それで
も一緒に来るの？」

「はいッ！絶対に一緒に行きますそして武原君が危なくなつたら警
察呼びます」

はは、優しいなこの子とりあえず久しぶりに召集かけようかな？多
分全員来るんだろうな…楽しくなりそう。

第五話後悔？～パッシュ？（後書き）

たまには感想ほしいかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5290z/>

スイッチ×2=大変です…

2012年1月13日20時46分発行